

八桁 由布樹 (東京学芸大学大学院)

yageta@c.kyoai.ac.jp

共愛学園前橋国際大学・専任講師

博士論文題目：外国につながる子どもの音楽文化を尊重する音楽科教育のあり方：
ライフストーリー研究と音楽授業構想・実践による探求

(発表要旨) 814 字

本研究は、うちなる国際化に応じた外国につながる子どもの音楽文化を尊重する音楽科教育のあり方について、理論的検討、ライフストーリー研究、および音楽授業構想・実践による探求を通して示唆を得ることを目的としている。本発表では、「4分の3がペルー」である B の語りから得られた示唆に基づき、B とともにゲスト講師として 2023 年に構想・実践した 1 時間の小学校音楽科授業 (第 8 章) を取り上げた。

構想にあたって着目した B の語りは、①教科書掲載教材について、その国に帰属意識をもつ人は必ずしも親しみを感じていないこと、②音楽的嗜好がみな違うように、全ての人の中に多様性があることに気づき、尊重することであった。そこで、本実践では、南米につながる人々が多く暮らす地域の 6 年生 65 名を対象とし、ペルーの音楽文化に理解を深め、一国内の音楽の多様性と音楽的嗜好の多様性に気づきを促すことをねらいとして設定した。

実践において、まず児童は、チャランゴの音色や奏法に着目した《コンドルは飛んで行く》の鑑賞を行った後、楽器の成り立ちについて理解し、ペルー音楽の混濁性に理解を深めた。続いて、沖縄民謡、地域の民謡、日本のアニメソングを鑑賞し、最も親しみを感じる曲を選んでその理由について交流した。最後に、B が親しみを感じるポピュラー音楽《Cuando Piensas en Volver》について曲想を味わって鑑賞し、B の経験や考えを傾聴した。

本実践で得られた児童の言説からは、諸外国の音楽を「親しみや好み」という日常的な観点から取り上げることで、児童は音楽観をさらに広げ、自身の音楽的嗜好について再考する契機となる可能性が示された。また、外国につながる人々と音楽科のあり方や授業を探求する過程で、実践者である筆者自身の眼差しの転換がもたらされた。今後、外国につながる人々の語りから教員や研究者が新しい視点や共感的態度をもち、彼らの音楽文化を尊重する音楽科教育や理論のあり方をともに探求していくことが期待される。